

在日コリアン社会における差別
～日韓・日朝のスポーツのこれからを考える～
A Study on Sports Relationship between Japan and Korea
～By the Discrimination of Korean-Japanese Society～

1K03B121-3

氏名 高村 圭輔

指導教員 主査 宮内 孝知 先生 副査 石井 昌幸 先生

＜序章 本研究の動機・目的・方法＞

我が国には第二次世界大戦という歴史的背景から、同民族でありながらも他民族である「在日コリアン差別」というものが存在する。

在日コリアンアスリートの存在は、社会全体の中における在日コリアン問題とどのような関係があるのだろうか。過去の歴史や文献を検証しながら、これからのより良い日韓・日朝関係構築の一助となるべく、在日コリアンアスリートと差別問題を切り口に、今後の解決策を探ることが本論の主たる目的である。

＜第1章 「在日コリアン」と差別の歴史＞

「在日コリアン差別」が起こった理由を、「なぜ在日コリアンが誕生したのか」という視座に立って段階的に論じている。

1-1 「差別」とは何か

社会学事典の要旨から「差別」は人間社会のなかで必ず生じてしまう不可避の現象であり、異質なものはその全てが差別の対象になりうる要素を持っているという結論に至った。

1-2 「在日コリアン」の歴史

1910年の「日韓併合」の前年、日本にわずかしかなかった朝鮮人は植民地統治が終わった1945年の時点で約240万人にまで膨れ上がった背景には、朝鮮人農民の離農による「流民化」と当時の日本の労働力需要、そして戦時体制への動員があった。

1-3 「在日コリアン」の誕生

終戦を我が国で迎えた在日朝鮮人にとって、8月15日は「解放記念日」であった。しかしながら、この戦いにおいて勝者でもなければ敗者でもなかった彼らは、帰る「祖国」が無いために生じた新たな被支配の時代をどうスタートさせたかについて論じた。

1-4 「在日コリアン」への差別の温床

日本で生きていくことを決意した彼らと彼らの子供たちは、厳しい差別環境の中でいかに民族の伝統と歴史を守り続けたのか、阪神教育闘争を例に論じた。

そして、この時の彼らを強く結び付けていたものこそが、今日の彼らの生活や価値観を構築する礎となった。それが、

祖国とは一線を画した独自の「在日コリアンアイデンティティ」である。

＜第2章 スポーツと「在日コリアン」＞

在日コリアンアスリートの存在は、在日コリアンの歴史的背景を抜きにしては物語ることは出来ない。そのなかで、在日コリアンスポーツの歴史を「前力道山時代」「力道山時代」「金田正一・張本勲時代」「在日アマチュアスポーツ隆盛期」に分け、その時代ごとに在日コリアンアスリートの成立過程と時代背景を比較した結果、在日コリアン1世の価値観を咀嚼し、自分たち世代にあった形に再構築するという新しい在日コリアンアイデンティティの誕生であった。在日アマチュアスポーツアスリートは、今までくすぶった感情を抱いていた在日コリアン同胞に「新しい道標」を、目をそむけてきた日本人には「考える機会」を提供したという意味で、日本のスポーツ界に大変大きな功績を残したといえるだろう。

＜第3章 在日コリアン研究からの解決策＞

第1章と第2章から、スポーツの世界の在日コリアン差別は、在日コリアンの歩んできた歴史が大きく影響しているが、彼らの民族的結束を強固なものたらしめている民族アイデンティティと民族教育こそが、埋まることのない日本人と在日コリアンとの溝を生む原因であるという結論に至る。その解決策として、1世たちの言葉に感化されて公に発言するに至った在日コリアン論壇をはじめとした、在日コリアンと民族教育を研究対象としている研究者の文献をもとに、改めて在日コリアンと日本人の歴史認識を比較検討する。そして、彼ら当事者による被害者観に基づいて破綻した論理を断罪し、これからのあるべき教育の姿として、次世代の在日コリアンを中心とした歴史認識の創出を提案する。

＜第4章 まとめ これからの日韓・日朝関係のために＞

どの国や民族も、歴史と歴史認識は異なる。歴史認識はそれぞれの国や民族のアイデンティティに基づいてアレンジされるものであるし、それぞれの理解の仕方があって良い。在日コリアンの歴史とスポーツの関係から、「異質への慣れ」という新しい歴史認識を提案する。